

岡崎市議会議長 様

支出番号

8

会派名

民政クラブ

代表者名

柴田 敏光



下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政務活動旅行報告書

令和 2年 3月30日提出

活動年月日	令和 2年 1月 8日(水)～令和 2年 1月 9日(木)	
氏名	太田俊昭、加藤嘉哉 井町圭孝	
用務先 及び 内 容	1	用務先 京都府亀岡市
	1月 8日	内 容 かめおかプラスチックごみゼロ宣言プロジェクトについて
	2	用務先 滋賀県米原市
	1月 9日	内 容 エリアの特性に応じたデマンド方式導入について
	3	用務先
	月 日	内 容
	4	用務先
	月 日	内 容
備 考		



視察者	太田俊昭・柴田敏光・鈴木英樹・井村伸幸・加藤嘉哉
視察日時	令和2年1月8日(水) 14時00分から15時30分
視察先・概要	京都府亀岡市 人口 89,143人、世帯数 38,897世帯 面積 224.80km ²
視察内容	かめおかプラスチックごみゼロ宣言プロジェクトについて
選定理由(目的)	プラスチックごみの排出量を削減することで、自然環境の保全やリサイクルについての取り組みを推進する。
岡崎市の現状と課題	プラスチックゴミ排出量削減に向けての取り組みがまだまだ進められていない状況である。
視察概要及び評価	<p>(1) かめおかプラスチックごみゼロ宣言に至る経過</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2005年保津川下りの船頭さん2人による清掃活動が始まる。 ・2007年保津川の環境保全に取り組むNPOプロジェクト保津川が誕生 ・2012年海ごみサミット・亀岡保津川会議を開催(内陸部の自治体) ・2013年川と海のつながり共創プロジェクト設立 ・2015年桂川市長が環境先進都市を目指す ・2018年亀岡市ゼロエミッション計画を策定 ・2018年かめおかプラスチックごみゼロ宣言を行う <p>・目指す目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 市内店舗でのプラスチック製レジ袋有料化を皮切りにプラスチック製レジ袋禁止に踏み切り、エコバック持参率100%を目指す取り組みを進める。 2. 「保津川から下流へ、そして海にプラスチックごみを流さない」世界規模の海洋汚染(マイクロプラスチック)問題に立ち上がる意識の繋がりを呼びかける。 3. 当面発生するプラスチックごみについては100%回収し、持続可能な地域内資源循環を目指す。 4. 使い捨てプラスチックの使用削減を広く呼びかけ、市内のイベントにおいてもリユース食器や再生可能な素材の食器を使用する。 5. 市民や事業者の環境に配慮した取り組みを積極的に支援し、世界最先端の「環境先進都市・亀岡」のブランド力向上を目指す。 <p>(2) 具体的な先導的プロジェクト</p> <ul style="list-style-type: none"> ・①マイバック100%をめざそうプロジェクト ・②リバーフレンドリーレストランプロジェクト ・③いつでも、どこでも亀岡の美味しい水プロジェクト ・④プラごみゼロでまちのしごと応援プロジェクト <p>レジ袋禁止条例を来年度3月に市議会で制定に向け取り組みを進めている。</p> <p>(3) 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数ヶ月で約53万枚削減。消費者の83%がレジ袋を辞退するというかなり大きな変化があったとのこと。これまでエコバック持参の方にポイントを付与するなどの施策も考えてきたが、レジ袋の有料化の効果は大きい。 ・亀岡市の取り組みはプラスチックという切り口であるが、決して局所的ではなく、亀岡ブランド力「シビックプライド」として、SDGsの観点からも様々な項目の方向性と合致して取り組みである。 <p>(4) まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・亀岡ブランド力シビックプライドとして、SDGsの観点からも、環境はもとより、企業誘致・雇用創出、エネルギーの地産地消、保津川の生態系保存、まちづくり・しごとづくり等、様々な活動に取り組むことで、「環境先進都市・亀岡」を目指す活動が推進されている。
本市への反映 (意見・課題など)	<p>(太田俊昭)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成16年に保津川船下りの船頭2名の運動から始まり、平成30年の「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」にまで至った。現在は「ゼロ宣言」を通して目指す5つの目標に取り組み、「レジ袋禁止条例」や、「海ごみサミット」を進めながら、「使い捨てプラスチックゼロのまち」そして「世界に誇れる環境優先都市」実現のための「オリジナルアクション」を進めている。本市でも実行可能な政策である。保津川上流の市町との連携(ゴミの漂着が続く)が大切であり、今後、沿線市を海ごみサミットに含めて考えるべきではと考える。



環境市民部 山内課長様
大西課長様



亀岡市役所

(柴田敏光)

・プラスチックごみはどこの自治体も頭を痛めている案件ではないかと考える。本市も買い物時のマイバック利用を推進しているが、市民の皆さんに対して意識を強く持って頂く為の広報等が弱いのではないかと考える。亀岡市は、船頭さんの清掃活動でスタートをした事業である。本市も河川に囲まれた街でありプラスチックごみの撤去は真剣に考えていかななくては環境問題として大きな影響を与えるのではないかと考えます。本市もプラスチックごみを出さない対策を計画していかななくてはならない、またペットボトルも同様に行う必要がある。住民の協力も得て清掃活動を行うことも市民の皆さんの理解を得て取り組んでいくべきである。時間のかかる取り組みであるが、早期にスタートしなくては先延ばしをしても解決しないので早期の活動を願う。

(鈴木英樹)

・2005年に保津川にごみが堆積して、観光で来られた方に対し景観を損ねることから、2人の船頭さんが清掃活動の取り組みが始まりました。2年後には、NPO プロジェクト保津川の組織を立ち上げ、保津川の環境保全の取り組みにつながりました。その後、プラスチックゴミが80Km離れた大阪湾まで流出などの調査が行われ、海洋汚染問題として捉えられ、内陸部では初の「海ごみサミット2012 亀岡保津川会議」が開催されることになりました。そのことにより、一地域の問題ではなく地球規模の環境保全の取り組みにつながりました。同年を世界的に見ると、当時高校生の「Boyan Slat」が、海洋プラスチック特にマイクロプラスチックについては、将来の子供たちも含めた、海洋食文化に警告を訴える発表がされ、その対策に対しクラウドファンディングで200万ドル集まるなど、世界的にも環境問題がクローズアップされました。行政として、将来の環境や食文化を守るため、先ずは亀岡が率先し取り組むことで共感する仲間を増やし、将来的にはプラスチックごみをなくす取り組みにつなげようとしています。そのため、市長と市議会が手を組み宣言を採択して進める内容については、共感するものです。船頭二人による河川清掃の取り組みから、地域、行政、流域、世界までも巻き込み、未来への子どもたちへつなげるための取り組みとなりました。本市も、川に恵まれ水や自然が豊かな地です。今回得た内容を、未来の子どもたちへつなげるため、環境保全に活かしたいと思います。

(井村伸幸)

・亀岡市が取り組んでいる「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」は、2005年に保津川下りの船頭さん2人による清掃活動がきっかけで始まった活動である。それが、2018年には亀岡市ゼロエミッション計画を策定するまでに発展し、市内の店舗でのプラスチック製レジ袋有料化を皮切りにプラスチック製レジ袋禁止、エコバック持参率100%を目指すことにつながった。さらに、来年度にはレジ袋禁止条例を制定する予定とのことで、わずか数ヶ月で消費者の8割以上がレジ袋を辞退するという大きな変化には市民の理解が大きく寄与していると考えます。本市においても今後、市外、海外からの来訪者が増えることを考えると、ごみの処分は課題となることから、まずは、マイエコバックの推進活動を行政主体で取り組んではどうかと考える。また、プラスチックトレイもリサイクルできるとはいえ、自宅では可燃ごみとして出しがちなことから、店舗にタッパー容器などを持参するなどしてトレイの回収100%を目指してはどうかとも考える。

(加藤嘉哉)

・2人の船頭さんの清掃活動がきっかけで、保津川のごみ(特にプラスチック)を削減する取り組みが始まったとのこと。海洋プラスチック汚染は、生態系にも大きな影響を与えており地球規模の問題となっている。亀岡市においても大量のペットボトルやレジ袋などのプラスチックごみが保津川をはじめとして市民の生活環境、さらには観光にも大きな影響を与えている。そこで「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」を2018年12月にして、自然環境の保全と地域経済の活性化に一体的に取り組む「世界に誇れる環境先進都市」の実現を目指して目標を作っている。レジ袋の有料化によるマイバッグ100%を目指し、また市職員もマイボトルを持参し、ペットボトルごみを出さないように活動をしている。本市においても矢作川・乙川をはじめとした水と山々に囲まれた自然豊かな地域である為、環境保全については非常に重要な取り組みであると考えます。

● 政務活動視察調査報告書 (No.465)

委員会・会派名	太田俊昭、加藤嘉哉、井町圭孝	報告者：井町圭孝
視察日時	令和2年1月9日（木）	
視察先・概要	滋賀県米原市 米原近江地域共同課 ・人口 38,719人 ・世帯数 13,922世帯 ・面積 250.39km ² ・人口密度 156.67人/km ²	
視察内容	『エリアの特性に応じたデマンド方式導入』について	
選定理由（目的）	米原市が運用しているデマンド方式について学ぶ。	
岡崎市の現状と課題	岡崎市では、全域に路線バス、中央部のまちバス、額田地域のコミュニティバスが運用されているが、地域によってはバスが使いにくく、より使いやすい公共交通を求める声がある。	
視察概要及び評価	<p>1. 米原市のデマンド方式の特徴</p> <p>(1) 米原市の『まいちゃん号』はデマンド方式の完全予約制の乗り合いタクシーで、一般のタクシー車両を使用しているが、路線バス同様あらかじめ定められた停留所や運行時刻に合わせて、予約があった時にだけ走る事前予約制の小型バス。そのため、同じ便に複数人から予約があったときは乗り合わせとなる。また、予約のあった停留所間のみを最短距離で運行する。</p> <p>(2) 使用する車両は小型タクシーで、1台で全員が乗れない場合は同区間に複数台配備する。</p> <p>(3) 運行時間は6時台～19時台で年中無休</p> <p>(4) 利用料金は、おとな500円/こども250円 （地域内。市内の地域間移動の場合はMax2,000円） 乗車回数券 11枚つづり 5,000円も発行（こどもは半額）</p> <p>(5) 利用者登録は不要だが、出発時刻の1時間前までに予約が必要。 朝9時までの便については前日夜9時までに予約が必要。</p> <p>(6) 『まいちゃん号』予約は専用ダイヤル。</p> <p>(7) 事業運営体制は、米原市がタクシー会社（近江タクシー）と運行に関する契約を結び、タクシーがまいちゃん号として運行された際のメーター料金から、利用者負担分を除いた運行欠損額を市が補填している。 （毎月申請・実績報告） 予約の受付、配車、運行など事業運営はタクシー会社が実施する。</p> <p>(8) 停留所は各自治体から3～4か所選定してもらい、米原市内約500か所になる。</p> <p>(9) 一般タクシー連携利用が可能。市外連携停留所まで行けば、そのまままいちゃん号を利用し、市外に出ることができる。利用料金は市外連携停留所から通常のタクシー利用料金となる。</p> <p>(10) 路線バスも市内で6路線運行。デマンドを唯一導入していない伊吹地域は路線バスを走らせている。</p> <p>2. 米原市の課題</p> <p>(1) コミュニティバスは利用者が減少し、運行経費が増大。乗り合いタ</p>	

	<p>クシーまいちゃん号も利用者が急増し、財政負担が急増するなど、財政負担が増大している。</p> <p>今後乗り合い率の向上、バス利用促進を図る。また、利便性と効率性のバランスを踏まえた再編も検討。</p> <p>(2) 乗り合いタクシーの利用者急増による慢性的車両の不足 (特に午前中) ⇒予約受付時間の見直し(ただし利便性が低下) ⇒乗り合い率の向上、ドライバーの確保(ドライバー不足はバスも同様)</p> <p>(3) 乗り合いタクシーにおける電話以外の予約方法の検討 ⇒受付オペレーターの手腕が必要。システム化することが理想</p>
<p>本市への反映 (意見・課題など)</p>	<p>【井町】 岡崎市議会も今期『地域内交通導入検討特別委員会』を立ち上げ、地域事情に応じた地域内交通を導入するための研究を開始した。 小型タクシーをそのまま利用している例はおそらく少ないと思われ、このような運用方法も可能であることも委員会の中で共有したい。</p> <p>【太田】 路線バス6路線、乗合タクシー(デマンド区域運行)で交通空白地をなくしたことは素晴らしいことです。 しかし、乗合タクシー新「まいちゃん号」市内全域の運行で、路線バス6路線の利用者の減少と乗合タクシーの利用者が急増(1.5倍)し、財政負担が急増(1.8倍)となっている。 今後については、利便性と効率性のバランスを踏まえた再編や運用状況のシステム化を図る必要がある。 本市への導入は、費用対効果を考えるならば特定区域での運行方式なら可能か？</p> <p>【加藤嘉】 乗合タクシーにより交通空白地をなくしたという取り組みについて、非常に参考になったが、市の財政負担が年々増大している点が気になる点である。本市においても地域内交通に取り組んでいるが、市民の利便性と市の財政のバランスというのは非常に難しい問題である。ただ、乗合タクシーの運用方法については参考にできる。</p>

